

[プロジェクト名]	[分野]
緑がつなげる心の和	ボランティア
[代表者]	
農学部 生物生産科学科 2年 新槇 実広	
[参加者]	
新槇 実広（農学部・生物生産科学科・2年） 石井 伸洋（農学部・生物生産科学科・2年） 岡田 哲輝（農学部・生物生産科学科・2年）	
[連携先]	
茨城県立医療大学	
[プロジェクトの実施計画概要]	
<p>このプロジェクトは園芸療法による精神障害のリハビリを学生ボランティアにより補佐しているというものである。茨城県立医療大学院デイケアに通所している園芸療法の参加者へ、茨城大学農学部のフィールドサイエンス教育研究センター内の農場の一部を提供し、農作業を行ってもらうというものである。その際にボランティア側が農業・園芸に関する栽培技術的な指導、作業補助などを行っていくつもりである。</p> <p>参加者の多くは統合失調症を発症しており、これは思考、知覚、自我意識、意志・欲望、感情など、多彩な精神機能に障害が見られる精神疾患の一つとされているものである。特にこの症状は自発性や意欲の低下が見られ、重度のうつ状態となり、他者とのコミュニケーションにも支障が生じるなど、社会生活に大きな障害をもたらすものである。この治療法の一つである作業療法の中に園芸療法は含まれる。作業活動を主体として行う治療であり、作業を通じた交流が他者理解や本人のストレス解消につながったり、自己価値観を高めたりする効果が有ると言われている。また最終的に農作業によって得られた収穫物を学祭等のイベント時に参加者自身に販売してもらうという試みを計画しているが、これは販売を通じて一般の人とのコミュニケーションをとることにより、自分の殻にこもりがちになってしまうこの症状の改善を図り、他者との交流、販売活動への参加によって社会生活への復帰の足がかりとなることを期待するものである。またこの活動が地域の人に精神疾患と戦う人々についての理解を深めてもらう場となることも期待している。さらに売れるものを作れたという達成感は参加者へ「喜」という感情をもたらし、自信を与えるものと思われる。農作業が楽しいという思いを抱いてもらえれば、農業について学んでいる我々農学部生にとっても喜ばしいことであり、指導をするということは知識や技術の向上が必要となるため、より主体的な農業についての学習意欲が増していくものではないかとも思われる。このように園芸療法参加者とボランティア側双方に益があり、また未だに偏見等無理解の多い精神障害者に対する理解を地域に広めていく可能性をもっている。バリアフリー社会を目指す上でも地域に貢献でき、そのような面でも有意義な活動となることが期待できる。</p>	
[プロジェクトの成果報告]	
<p>このプロジェクトを開始してから園芸療法参加者また我々双方にプラスとなる様々な変化をもたらしたと思われる。具体的にはまず、我々から見た参加者の変化として他者との接し方がとても積極的になり、参加者から質問や話しかけられるなどといった機会が増えた。活動当初はこちらの指示に淡々と従うようであったり、あまり楽しそうに作業をしているようには見えなかった。しかし、活動をしているうちに自分たちが植えた植物が収穫できるようになると、収穫の喜びから笑顔も見られるようになり、またその作業を通じて我々とのコミュニケーションの機会が増えていった。作物の生育を心配したり、参加者同士が協力して作業を行うような光景も見られ、自分以外の他者の存在を意識するようになったのではないかと思われる。</p> <p>我々学生としては講義で学んだ事象（病虫害・植物生態など）を実際に自分たちの目で見て経験することができ、知識を実学に生かすことができた。さらに、様々なイベントや大学の実習に自分たちが積極的に参加するようになった。農学部の鍬耕祭や阿見町での青空市では園芸療法参加者とともに栽培した野菜の販売を行い、また我々の活動の紹介をするチラシを作成しその配布</p>	

も同時に行うことができた。これらのイベントには少なからぬ地域の一般の方の参加があったため、多少なりとも我々の活動に対して理解が得られたものと思う。

これらの活動の中でいくつかの問題も見られた。平日に行っていた農場での活動には毎週ほぼ一定の出席率であったが、上記のようなイベント時の園芸療法参加者の出席は任意であったためか、その出席率は極めて低いものであった。通常の園芸療法の活動は茨城県立医療大学における治療の一環であるが、これらのイベントはそれから外れるため、参加者の方の時間の都合がつかないことが多いようであった。また我々学生はイベントの運営側としての参加の経験が乏しく、満足な計画性をもって行動することができなかつたため、準備等でかなり遽しく動かねばならなかつた。このため学務や会計の方に迷惑をかけてしまうこととなつてしまった。

来年度は上記の反省を踏まえて事前から計画性を持って行動していきたいと考えている。加えて、常時の活動においても今年度は病害虫の発生によりまったく収穫できなかった作物がいくつかあつたので、今回はこの失敗を考慮し先生方と相談しながら、参加者の方々に喜んでもらえるような作物が作れるよう努力していきたい。